

シリア難民の軌跡を追う（フォトエッセイ）

著者	今井 宏平
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	267
ページ	26-29
発行年	2017-12
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00049804

■フォトエッセイ■

シリア難民の軌跡を追う

写真・文 今井宏平

Kohei Imai



写真1 トルコ語とアラビア語の両方で書かれたケバブ屋の看板



写真2 ケバブを焼くシリア人



写真3 絶品シャワルマ3人前。ボリュームたっぷり、野菜もたっぷり



写真4 不動産賃貸業者にもアラビア語の表記がある



写真5 シリア人が多く住む地域のアパート

●シリア内戦は今世紀最大の人道危機

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の調べによると、2017年9月末の時点でシリア難民の数は523万人を超えた。その多くは近隣であるトルコ、レバノン、ヨルダン、イラクなどに避難している。また、2015年夏から2016年春まで、多くのシリア難民がトルコ経由でヨーロッパに渡ったことで、ヨーロッパ難民危機が発生した。国内に留まるものの、自分の故郷からは追われた国内避難民の数も、80万人を超えとも言われている。シリアと910キロに及ぶ国境線を共有するトルコは、世界最大のシリア難民受け入れ国である。2017年9月末現在で318万人以上のシリア難民、シリア難民全体の約60%を受け入れている。

●シリア難民が最も多く住む町：イスタンブル

難民と聞くと、どうしても受け身で脆弱な人々を思い浮かべがちである。しかし、難民は決してそうし

たか弱いだけの存在ではない。彼らは自らの意思で移動し、自らの力で収入を得ている。例えば、トルコのイスタンブルのファティヒ地区ではたくさんのケバブ屋があるが、現在、多くのケバブ屋がトルコ語だけでなく、アラビア語の看板を掲げている（写真1）。筆者は2軒のケバブ屋に入ってみたが、1軒目の店ではトルコ語が全く分からないシリア難民だけが働いており、驚いた。2軒目の店ではトルコ語とアラビア語の両方を流暢に話すシリア難民がケバブを焼いていた（写真2）。このお店のシャワルマ（アラブ地域のケバブ）は絶品であったが、大き過ぎてちょっと胃にもたれた（写真3）。

多くのシリア難民はトルコ政府が用意した難民キャンプには住まず、シリアと隣接する県や大都市の郊外で暮らしている。トルコ国内で最も多くシリア難民が住んでいるのがイスタンブルであり、その数は50万に達している。イスタンブルの中でも保守的な人が多



写真6 レスボス島の最大の都市、ミティレネ



写真7 難民が押し寄せたスカラ・スカミアスの沿岸部



写真8 悪徳業者が販売していた携帯の防水ケース



写真9 「浮かない」浮輪とライフジャケット

く住んでいるファティヒ地区は、約3万人のシリア難民を受け入れており、これはイスタンブールの地区の中でも4番目に多い数となっている。この地区の不動産賃貸業者も、トルコ語だけでなくアラビア語を表記している（写真4）。彼らにとってシリア難民は格好の商売相手となっている（写真5）。

ただし、イスタンブールの一部がシリア難民によって「リトル・ダマスカス」と化しているかというところでもないというのが、ファティヒ地区や、やはりシリア難民が多く居住しているゼイティンブルヌ地区を訪れた際の感想である。シリア難民は、トルコ人居住区の中で共存している。また、これらの地域にはシリア人だけでなく、イラク人など、他地域からの移民も多く住む。

●シリア難民のヨーロッパへの玄関口：レスボス島

2015年夏に発生したヨーロッパ難民危機で注目を集めたのが、トルコから5.5キロ離れたギリシャの観光地、レスボス島であった。きれいな海に白い家とい

ういかにも地中海のリゾート地という趣きのレスボス島に、シリア難民が次々と押し寄せたのである（写真6）。シリア難民が押し寄せたのは、レスボス島北東部のスカラ・スカミアスという地域であった（写真7）。

トルコからシリアに渡る難民の必須アイテムは、携帯電話である。難民同士のSNSのやりとりに彼らの動きは左右されるため、トルコからギリシャへ渡る際も、携帯電話だけは濡らして壊してはならない。そこに目をつけた悪徳業者が売り出したのが、携帯の防水ケースであった（写真8）。悪徳業者はさらに、「浮かない」浮輪やライフジャケットも高額で販売していた（写真



写真10 レスボス島はタコがよくとれる。グリルが美味



写真11 ゴミ捨て場に捨てられたライフジャケットの山



写真12 FRONTEx本部が入ったワルシャワのビル



写真13 丘の上からも海上の監視を行う



写真14 国境を監視する警備隊。腕にはFRONTEXの腕章

9)。偽物はもちろんのこと、本物のライフジャケットも、難民はレスボス島に到着するともう使用することはないので海岸に捨てていく。これにより、海岸がライフジャケットのごみで溢れ、レスボス島の漁民たちの漁に悪影響が出た（写真10）。そのため、シリア難民を保護するためにスカラ・スカミアスに集まったNGOの人たちが地元の人々と協力して、海岸の美化活動を定期的に実施したそうである（写真11）。

欧州連合（EU）には、ヨーロッパの国境管理を行う欧州国境・沿岸警備機関（FRONTEX）という組織がある。2005年に創設され、本部をワルシャワに置いている（写真12）。FRONTEXができてから、ヨーロッパへの移民の取り締まりは強化されたが、2015年の危機にはFRONTEXも対応できなかった。FRONTEXは危機後、職員を大幅に増員するとともに、より一層国境管理に力を入れた。2017年10月現在もレスボス島をはじめ、シリア難民が多く渡航したキオス島、サモ

ス島、コス島、レロス島に事務所を置き、ポセイドン作戦と呼ばれる難民の取り締まり活動を展開している。筆者もFRONTEXのポセイドン作戦に同行させてもらい、国境監視の現場をみることもできた（写真13、14）。また、監視に立ち会って実感したのが、トルコとレスボス島の近さである（写真15）。屈強な成人男性なら泳いで渡れるかもしれない。それほど近さである。

「イスラーム国」は壊滅しつつあるが、それがシリア内戦の終わりを意味するわけではない。シリアに留まった人にもシリアから脱出した人にも、平穏が訪れることを切に願う。

いまい こうへい／アジア経済研究所 中東研究グループ
専門はトルコ外交、国際関係論。



写真15 手前がレスボス島、奥がトルコ本土